

不惑のフィールド・ワーク（紀行・たより）

著者	久保 正敏
雑誌名	民博通信
巻	46
ページ	63-68
発行年	1989-11-30
URL	http://hdl.handle.net/10502/00005852

不惑のフィールドワーク

久保正敏

歳月人を待たず。自分では若いつもりでいたのに、気が付けば三〇代とお別れする日も近い昨年七月および本年一月の二回にわたり、コンピュータ民族学が専攻で、あまりフィールドワークとは縁がないと思っ

ていたわたしが、民博のオーストラリア・アボリジニのコミュニティのひとつであるマニングリダを訪れ、現代狩猟採集民オーストラリア・アボリジニの社会にコンピュータを持ちこむという、やや途方もないフィールドワークを経験する機会を得た。そのそもそものいきさつから、不惑を迎えて始めたわたしのフィールドワーク顛末記を始めた。

アボリジニ領内では、過去の植民地政策への反省から、アボリジニの生活全般を支援するさまざまな機構や組織がオーストラリア連邦政府の援助のもとに設置されてき

た。マニングリダは、連邦政府直轄の生活支援拠点として一九五七年にいち早く設置されたコミュニティのひとつである。

マニングリダには、アボリジニの人達が約七〇〇人、白人を含めアボリジニ以外の人達が約五〇人住んでいる。ここには、政府の最先機関、飛行場、警察、病院、学校、マーケットなどのさまざまな施設が置かれ、生活支援活動が進められている。アボリジニの人達は、現在でも野外キャンプ地にでかけ、狩猟採集をしばしば行いが、そのスタイルは随分と近代化されたものである。かつての槍に代えて手には銃を持ち、ブッシュの中を四輪駆動車で疾走し、無線ラジオでグループ間の連絡をとりながら、狩りを行う。銃、四輪駆動車、無線ラジオは、いわば現代狩猟採集民の三種の神器であるが、ブッシュでの酷使に耐えかねてしばしば故障する。マニングリダには、これ

らの修理工場が設置されており、彼等の伝統的狩猟採集文化を支援する意味で非常に重要な役割を果たしていると言えよう。

この修理工場は、Bawinanga Aboriginal Corporation（略称 BAC）という政府出資の企業体であるが、その白人責任者B氏と民博のオーストラリア・グループは一〇年来の深い関係があり、フィールドワークを進めるうえで彼にたいへん世話になってきた。BACでは、修理依頼の受付け、修理明細の帳簿付け、それに基づく請求書発行、入金受付け、などの業務の正確・迅速な処理をねらって、これらを電算化することを計画し、民博グループに相談を持ちかけた。グループ・リーダーの小山修三氏は、それなら民博にコンピュータ専門家がいるからということで、B氏が別件で民博を訪れた一九八七年の夏、打合せを行い、わたしもオーストラリア・グループに加わることになったのである。

これらの業務を処理するソフトウエア・システムは、現地での修理業務を支援すると同時に、アボリジニの人達の狩猟採集活動の記録を間接的にデータベース化する機

能も合わせ持つことになる。そのデータは、我々民博グループにとって、アポリジニの狩猟活動を解析するのに貴重な資料となる。

BACは、修理業務だけではなく、社会保障費の給付、アポリジニの芸術作品の買上げ、販売も行っている。これらのうち、社会保障費の給付事務を電算化すれば、アポリジニの複雑怪奇な親族組織を解明するのに役立つデータが集まるであろう。ただし、個人のプライバシーに十分な注意を払わねばならないのは当然であるが。さらに、芸術作品の買上げ、販売業務を電算化し、作品のテーマ、素材などをデータベース化できれば、アポリジニ芸術の変容を追跡することも可能となろう。このようにして構築された「アポリジナル・データベース」は、アポリジニ文化の研究素材となるとともに、現地コミュニティ自身の意志決定に役立つ。この互恵性は、従来からの応用人類学に新風を吹き込む可能性がある。

まことにかっこうのよいこのような「新・応用人類学」的目標にそのかされて、わたしが最初にマニングリダを訪れたのは

昨年七月末であったが、実際の現地での仕事はそう容易なものではなかったのである。ノーザン・テリトリー（北部特別州）の州都ダーウィンから九人乗りの小さなプロペラ機に揺られること約一時間でマニングリダに着く。陸路もあるが、四輪駆動車で一〇時間以上もかかるうえに、雨季にはしばしば通行不能となるから、飛行機が唯一の交通手段と考えてよい。飛行機代はそんなに高くはないとは言え、そうたびたびダーウィンに往復できるものでもないから、いったんマニングリダに入れば仕事が終わるまで都会の空気は吸えないものと覚悟せねばならぬ。

白状すれば、ソフトウェア開発について、わたしは当初かなり楽観的な見通しを持っていた。BACでは既にIBM製のパソコンを購入していたので、既製のデータベース・システムを乗せ、少々のプログラムを作れば事足りるぐらいに考えて、ほいほいと現地に入ってみたものの、実はコンピュータらしきものを見たことも触ったこともない人がほとんどなのであった。にもかかわらず、修理業務のすべてを一挙に

コンピュータ化したいという大胆かつマジな希望をB氏が持っていることが判明し、わたしは現地入り早々、大きなプレッシャーを感じるようになった。なぜなら、会計業務のためにも、また我々にとって貴重なデータベースを作り上げていくためにも、正確なデータ入力が必要なのは言うまでもないが、そのためには、コンピュータの素人にも容易にデータの入力や訂正ができるような、念入りなユーザ・インタフェースを作らねばならないからである。

すべからくソフトウェアの開発において最も大きなウエイトを占めるのは、ユーザとの対話を扱うユーザ・インタフェース部分である。処理の核となる論理を扱うプログラム部分はむしろ簡単で、対話を処理する部分はしばしばその何倍ものプログラム・ステップを要する。しかも、全くキーボードに触れたこともない白人やアポリジニの人にも扱いき易く、トラブルが生じても技術者を呼びつけることもままならない環境で稼働するタフなソフトウェアが要求される今回の場合、相当量のユーザ・インタフェース・プログラムを開発する必要がある

る。

こんなわけで、マニングリダ到着の翌日から、わたしは悲惨な生活を送るはめになった。BACが用意してくれたプレハブ宿舎には、シャワー、トイレ、レンジ、洗濯機、クーラーと、生活用具は一応そろっている。そこに、パソコンを持ちこみ、プログラム作りを開始した。とにかく、滞在期限内に完成しなければならぬ。マニュアルを読んではパソコンに向かうという繰り返す。最初の一〇日は、わたしをアテンドしたうえに、プログラム作りを分担してくれた杉藤重信氏（榎山女学園大学）がいてくれたからよかったが、彼が自身のフィールドにでかけてしまったからは、一人黙々と仕事を続ける。息抜きと言えは自炊の時間と近くのマーケットへの買出しぐらいである。あの日本人は閉じ籠って何をしてるんだと、時々アポリジニの子供達が覗きにくるが、「またこんどね」と邪険に追い返す。万事のんびりしたマニングリダの住人には、働きづめのわたしの姿はまことに異常に映るのであろう。毎日一五時間近くもプログラム作りに専念していると、確

かに仕事ははかどるのだが、一種の憑依状態に入り、夢の中にプログラムのフロアが現われるまでになる。ゲーム・ソフトの開発に明け暮れるマニアたちの生活もかくやと思われる毎日が続け、なんとか滞在期限一日前にソフトウェアの完成にこぎつけた。

さて、いよいよパソコンを宿舎からBAC事務所に移す段である。責任者のB氏は、この日に備え、事務所の一番奥をわざわざパーティションで仕切り、小部屋を作っていた。彼の意気込みがわかるうというものである。ここに、大金庫、電話、そしてパソコンが収まるのである。ただし、このBACの奥の院がクリン・ルームだと考えてはいけない。マニングリダは人工の町であるが、道路はほんの一部が舗装されているに過ぎず、一面が赤土である。その上をアポリジニの人達は例外なくはだしで、白人達もほとんどがはだしにゴム草履で歩き回り、その足でこの奥の院に入ってくるものだから、赤土の細かい砂埃が容赦なく侵入する。ディスク装置に砂埃が入るものなら、たちどころにコンピュータは

故障してしまう。

この不安材料に加え、電源の問題がある。マニングリダの電力はただ一カ所の石油火力発電所でまかなわれているが、一〇日に一度は燃料切れで発電機が止まり、町全体が停電する。石油の残量を定期的にチェックすれば良いものを、がんらいのんびりしたオーストラリアの、しかも辺境の地マニングリダのこと、停電してはじめて石油を補給するというおおらかさである。停電しないまでも、電圧や周波数が一割ぐらゐ変動するのはしょっちゅうのことらしい。したがって、電源周波数に同期する電気時計やビデオデッキのタイマーは、ここマニングリダでは役に立たない。時計の狂いは実害がないからよいとして、コンピュータは停電はもとより電圧変動にも弱いから、データ入力中であればソフトウェアが致命傷を受けてしまう。電源電圧が大きく変動するとそれに応じてモーターを使った電気製品、たとえばクーラーの音の調子が変わる。クーラーの音を頼りに危ないと思っただけでコンピュータを止めることになんとか乗りきるしかない。

以上のような不安材料が一杯のマニングリダで果たしてデータベース・プロジェクトが成功するのか、心もとないことおびただしいが、乗りかかった船、操作法の講習を一日ですませ、マニングリダを後にしたのが、わたしのフィールドワーク第一回であった。

民博に帰って二カ月、うまく稼働しているかと気にはしていたわたしのもとに、国際電話がかかってきた。データ入力中に停電し、それ以後ソフトウェアの動きがおかしくなったという。不安が的中してしまつた。抜本的な電源対策としては、停電してもバッテリーから給電できる特殊な無停電電源装置を購入するよりほかはない。早速にこの電源装置を発注するように頼み、ソフトウェアの修正はわたしが再訪するまで待つてもらうことにした。

かくして、本年一月、わたしは再びマニングリダの土を踏むこととなつた。ダウン以来使われた形跡のないコンピュータの埃をはらい、わたしの到着と相前後して届いた特殊電源装置をセットし、今度こそ本格的に稼働できるようにと、業務の実際の担

当者と念入りな打合せを行った。ここで、先の訪問時に作ったユーザ・インタフェースはアポリジニの人には使にくいというクレームが付き、ソフトウェアの大幅な修正を迫られた。この修正に時間がかかり、またもや滞在期限ぎりぎりに完了したソフトウェアがようやく日常業務に使われたのを確認してから、帰国の途についた。

このようにして、ソフトウェアは稼働を始め、ようやくデータが蓄積され始めた。修理業務以外の、芸術作品に関する業務、社会保障費給付業務などのコンピュータにも着手していかない現段階では、十分な成果を生み出すには至っていないが、アポリジナル・データベースを構築するという目標は、とにかくその第一歩を踏み出した。今回のわたしのフィールドワークは、こうした応用人類学的な観点から始まったが、実際にソフトウェア・システムを開発し、またアポリジニの人達に操作法を教えるなかから、これとは別の興味ある研究テーマも浮上してきたのである。

オーストラリア・アポリジニはがんなら無文字社会であつた。にもかかわらず、神

話やそれに関する儀礼などの精神文化は実に確かな形で伝承されている。この伝承の方法は、西欧流のそれとは異なつたものである。マニングリダで長年にわたつてアポリジニと接触してきた白人教師の話、民博グループの同僚研究者たちの話などを総合してみると、アポリジニの人達の教育や学習は「イメージ」をベースに行っているらしい。

例えば、神話が伝承されていく時、学習する側は、その内容を身のまわりの具体的な事物と結び付け、自分の頭の中にしつかりとしたイメージを組み上げることで、学習する。これと同じように、儀礼に伴う踊りの伝承においても、教える側は生徒にあれこれと指示するのではなく、とにかく演じて見せ、生徒側はそれを自分の動きとして頭の中にイメージを再構成できるまで、じっくりと見る。これが、アポリジニの伝統的な教育・学習方法だといふのである。スポーツの世界のイメージ・トレーニングに似た方法と言えよう。

一般にアポリジニは、他人からこと細かく指摘を受けることに慣れていないし、そ

うされることに反発を示すプライドの高い人達であると言われるが、これは、彼らが論理的な説明を必要としないイメージ学習に慣れているためとも考えられよう。アポリジニ地域でもコンピュータ支援教育(CAI)が試みられているが、それに携わっている白人教師の話では、白人の子供よりもアポリジニの子供の方に、より大きな教育効果が見られるとのことである。これも、人間教師のように口うるさく正誤を指摘することのないCAIの方が、アポリジニ流の教育に合致しているためかも知れない。

今回導入したソフトウェアについても、こんな話がある。BAC責任者B氏の目撃談によれば、アポリジニのG氏は、わたしたちがいろいろと操作するようすをじっと観察し、まわりに誰もいなくなったのを見はからってこっそりと自分で操作を練習していたらしい。まさに、アポリジニの伝統的な学習方法である。ご承知のようにコンピュータのキー操作には、少しコツが必要である。キーを押し続けるとコンピュータはそのキーが何度も叩かれたものと錯覚し

てしまうことがあるから、軽いタッチでキーを叩かなければならない。わたしがBACの人達を集めて操作法を講習していた時、B氏も含めて白人達はなかなかこのコツがのみこめなかったのに対し、アポリジニの彼は実にキー・タッチが上手であった。イメージ・トレーニングの成果であろうか。

また、最初に作ったユーザ・インタフェースがアポリジニの人に使いにくかった点も、イメージに関係している。開発したソフトウェアはBACの業務別に階層的な構造を持っており、各サブ・システムを起動・終了する方法は、画面に表示したメニューで説明するように作ったのであるが、彼等はまず説明を読むことをしないで、階層的なシステム概念をなかなか理解してくれないので、操作ミスを犯しやすい。各サブ・システムごとに画面の図柄が異なり、一見ただけで、どの業務用のサブ・システムかが分別できるようなメニュー画面でないとだめだ、というB氏のアドバイスに従って、ユーザ・インタフェース部分を作り変えた。最近のワークステーションでは、

「アイコン」と呼ばれる図的メニューを多用してユーザ・インタフェースの改良をはかっているが、アポリジニは最もその恩恵に浴するべき人達なのであろう。

もっとも、こうしたイメージによる理解の方法は必ずしもアポリジニの人達に独特なものとはかぎらず、西欧流の教育・学習方法を受けた我々も何らかのイメージを媒介に概念を把握しているに違いないから、単に我々がより抽象的・論理的思考に慣れているだけなのかも知れない。しかし、もしもイメージの理解がアポリジニの文化に特徴的であるとすれば、それはなぜかという疑問が生じる。おそらくひとつの答えは、彼等の伝統的社會が、「ホルド」と呼ばれる小集団から成る狩猟採集社會であった点であろう。白人達の言うように、食糧の欠乏に備える必要がない狩猟採集社會では、貯蓄、備蓄、計画といった概念は発達しないうえで、小集団であるため、複雑な構造の組織やシステムも発達しない。抽象化や記号化といった操作は、複雑な概念を把握する必要上生じたものと考ええるならば、単純な構造の社會では、イメージ的理

解の方法が優勢であることもうなずけるのである。

狩猟採集の小集団社会であったがゆえに、直接的イメージによる理解の段階にとどまり、無文字社会であったこととあいまって、アポリジニの人は抽象化・概念化が不得手で、複雑なシステムを理解しにくい、というこのような説明は短絡的すぎるし、西欧流の教育を受け、流通経済に一部組み込まれつつある現代アポリジニ社会にそのままあてはまるとも考えられない。

しかし、空間認識や時間観念も含む計数の観念、経済観念、システム観といったものは、決してその文化と無関係ではありえない。それならば、アポリジニ文化における、これらの概念の認識や伝達の方法、もっと広く言えば情報の体系はどのようなものであるのか、また、これらが西欧流の教育によって与えられた諸概念とどのように衝突・共存しているのか、といった問題は、わたしの興味をおおいにそそる。のみならず、この問題は、わたしたちが導入したソフトウェア・システムがアポリジニ社会にうまく適合するかどうかにも直ちに

かわってくるし、さらにあえて言うならば、オーストラリア政府が進めているさまざまなアポリジニ生活支援活動が成功するか否かの鍵でもある。民族学的観点でこの問題を捉えなおし、他の地域の文化にも広げて考えていくならば、文化における情報の体系を比較する「民族情報学」、あるいは「情報人類学」とでも呼ぶべき新しい研究分野が成立するのではなからうか。

というような、やや大風呂敷的観念も念頭に置きつつ、本当に不惑を迎えた今年以降もフィールドワークを続けていきたいと考えている今日このごろである。

(第五研究部)

